

氏 名 なか がわ 中 川 さ つ き
 学位の種類 博 士 (文 学)
 学位記番号 文 博 第 199 号
 学位授与の日付 平 成 14 年 3 月 25 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
 研究科・専攻 文 学 研 究 科 イ タ リ ア 語 学 イ タ リ ア 文 学 専 攻
 学位論文題目 <美德>の帝国

——メタスタジオのオペラにおける絶対主義国家の理想型——

論文調査委員 (主 査) 教 授 齋 藤 泰 弘 助教授 天 野 恵 教 授 増 田 眞

論 文 内 容 の 要 旨

はじめに

メタスタジオ (Pietro Metastasio, 1698-1782) は十八世紀イタリア文学における、最も重要な詩人である。彼は幼い頃から即興詩の天才として名を揚げ、アルカディア派の中心人物であるグラヴィーナのもとで、最高の古典教育を受けた。その後1724年にオペラ・セリア『捨てられたディドーネ』を世に出し、イタリア各地の劇場で未曾有の成功を収めた。そして1729年には、当時のイタリア文学者の最高位である「神聖ローマ帝国皇帝の詩人」(poeta cesareo)としてウィーンの宮廷に招かれた。それから没するまでの50年あまりに渡って、彼はペトルルカにも匹敵する、全ヨーロッパ的な影響力を持ち続けたのである。

メタスタジオの作品は、十九世紀初頭まで欧州各地で繰り返し上演され、その度に絶大な成功を収めた。四百年にわたるオペラの歴史において、これほどの名声を手にした台本作家は他にない。彼は生涯に26のオペラ・セリアを書き、それは音楽だけを新しいものに変えて、時には60回以上も再演された。音楽作品としての最終的な数は、オペラ・セリアに限っても千を超え、オラトリオや小規模な劇、アリアの類まで加えると、天文学的な数となる。十八世紀の歌劇場はメタスタジオに支配されていたのである。一方で、彼の台本は音楽から独立した文学作品としても広く読まれ、その作品集は各国の王侯貴族や知識人たちによって愛好された。1780年から82年にかけて、パリで出版されたメタスタジオ全集の協賛者リストには、ヨーロッパ各国の国王、王妃、大臣、大使、知識人の名前がずらりと並んでおり、壮観である。

メタスタジオの台本は、古典の教養を基盤とした簡潔で調和の取れた詩句、そして音楽への配慮で際だっていた。またオペラ史においては、混沌としたバロックオペラの台本から余分な要素を削り取り、左右対称とも思えるほどに均整の取れた、厳格な形式を築き上げた点で一時代を画した。

しかし他の詩人たちの誰にもなせず、メタスタジオだけが成功したこと、各国の劇場で一世紀あまりにわたって喝采を博した最大の要因は、当時の支配階層が抱いていた願望を的確に捉え、それに洗練された形を与えて、舞台の上に映し出したことである。

メタスタジオの作品は、一見すると若い男女の恋愛を巡る事件を描いているように見える。しかし恋愛は物語の糸口にすぎない。彼のオペラの真の目的は、超人的な自制心と自己犠牲の精神によって統治を行う徳高き君主と、彼に忠実に仕える臣下との幸福な関係、恩恵と恭順の均衡という理想型を舞台の上に顕現することである。メタスタジオにとって、君主の絶対的な力を賛美し、国民を教化することは、宮廷詩人として生き抜くための方便ではない。彼は輝かしき王座と臣民の間の距離を埋め合わせる媒介者となり、人々を「楽しませつつ教化する」ことこそが、文学者の使命だと考えていた。そして誰よりも優雅で繊細な手さばきで、それをやり遂げたのである。

本論文の目的は、メタスタジオが描いた絶対王政のユートピアが、どのような理想を求め、どのような支配構造の上に成立しているのかを読み解くこと、一方で、こうした理想は、その中にいかなる限界や矛盾を孕んでいるのかを明らかにする

ことである。

メタスタジオが描く理想世界を理解するためのキーワードは、「美德 (virtu)」である。これは彼の作品世界の核となる、最高の徳目である。主人公たちはみな「美德」に従って生きることを望み、「美德」のためとあらば、愛情も自分の命も犠牲にしようと覚悟する。そして君主と臣下、親と子、恋人たちの全員が「美德」を介して結びつく。

それではメタスタジオの劇を支配する「美德」とは、具体的にどのような価値、どのような行為を指すのだろうか。それが目指すのは、どのような地点なのだろうか。「美德」という概念を検討していく過程で、彼の世界は、はっきりとした輪郭をあらわすだろう。

序章 メタスタジオとその時代

オペラ・セリアは、現在われわれが「オペラ」と考えているものとは異なる目的、異なる社会的文脈で上演された。メタスタジオの作品を正當に評価するには、まずこの点を理解することが不可欠である。ここでは十八世紀の宮廷劇場が、国家権力と深く結びついていたこと、そして当時のオペラは音楽よりも言葉のための作品であったことを概観する。

第一章 「美德」という規範

メタスタジオが描く「美德」とは、第一に「公」のために「私」を捨てることである。主人公たちは理性によって私的な欲望を制御し、社会的な義務を果たすことを目指す。

国家秩序の根幹を成すのは、統治者の「美德」である。君主は国民の幸福を実現するために、全ての個人的な欲望を断念する。彼は王座の上の殉教者である。また、君主には寛容さが求められる。彼は侮辱や裏切りに耐え、法を越えて人々に許しを与えねばならない。王冠に伴うのは義務と試練だけである。これほどの自己犠牲の能力を持つのは君主だけであり、ゆえに彼はもっとも尊い存在なのである。

一方で、臣下にとっては、君主に対して滅私奉公することが「美德」とであるとされる。臣下は君主のために、進んで愛や命を捨てようとする。しかし臣下の自己犠牲は決して実現せず、必ず国王によって救済される。国家のために犠牲になるのは王だけなのである。

第二に、「美德」は受動的な性質を持つ。苦難に耐えること、争いを回避することが崇高な行為だとされる。主人公たちは降りかかる災難を甘んじて受け、それが通り過ぎるのをじっと待つ。このように受動的な人間こそが高貴であるとされ、能動的な人間、すなわち運命と真っ向から対決し、みずから道を切り開いて行くようなタイプは、それよりも下位の存在として位置づけられる。つまり「美德」とは、現状を打破するための力ではなく、現行の社会体制を容認し、維持してゆくための、保守的な姿勢を指すのである。

第三に、「美德」は伝播する性質を持つ。徳高き行いはそれだけで完結するのではなく、それを目にした者を触発する。人間は誰も「美德」の種子を抱いており、適切な刺激さえあれば、それは花開くのである。逆に、罪を犯す者は、自分自身の良心によって裁かれ、自滅することとなる。ここにはデカルトの『情念論』の影響が色濃くあらわれている。メタスタジオはデカルトと同様に、人間の悟性を全面的に信頼するのである。

第二章 「美德」による階層秩序

「美德」は、すべての人間がそれに従って行動すべき、普遍的な徳目として賛美される一方で、それは特定の階層、性、民族に固有の美質として描かれる。「美德」の多寡は、現実社会の位階秩序に正確に対応している。君主は臣下よりも、男性は女性よりも、文明人は未開人よりも優れた「美德」を備えて生まれ、努力や教育などの後天的な要素によって、それを補うことは不可能である。ゆえに「美德」をより多く備える者が、より少なく備える者を支配し、教化することは正当であり、また義務でもある。そして「美德」の価値が理解できず、その傘下に入ろうとしない人間は、共同体から追放され、忘却される。「美德」はその背後に差別と排除の論理を持つ。「美德」という基準にもとづいて、人間は階層化され、秩序づけられるのである。

第三章 父から子への「美德」の継承——家族としての国家

神・王・父の類似性は、絶対主義を支える理念のひとつである。メタスタジオの劇においても、しばしば君主の姿に父親の像が投影されている。国王は「父のように」慈悲深く国民に接し、国民は「子のように」王に従うことが理想とされる。王は、はるか高みに存在する畏れ多い存在ではなく、つねに国民の側近くで彼らを見守る、慈愛に満ちた親密なイメージで

描かれる。

しかし、劇中に現れる家族像は、私的で親密なものではない。父親たちは絶対的な権力で子供たちを抑圧する、専制的な存在である。父は子に対して生殺与奪の権利を持つ。ましてや子の意志は父に帰属する。そして父の存在意義は、子供たちに公的な規範である「美德」を教えることである。つまり、家族とは私的な愛情を育む場ではなく、社会を支える紀律を継承するための国家の最小単位であり、そこでは家長への服従が絶対的な掟なのである。そして王への絶対服従の教訓は、父子の関係を通して、比喩的に説かれる。

したがって、子供たちに対して無条件で親密な愛情を注ぐ存在、つまり母親は、メタスタジオ的な「家族」の秩序を乱す、危険な存在である。だからメタスタジオは、『イシッピレ』を唯一の例外として、劇中の家族を父親と子供たちのみで構成しているのである。

第四章 「美德」に殉じることへの躊躇——『アッティリオ・レーゴロ』における分裂

メタスタジオは『アッティリオ・レーゴロ』において、公共の利益に殉ずる「美德」を体現する英雄を描いた。周囲の者はみな、祖国のために命を捧げる主人公の「美德」に感嘆し、それに倣うことを目指す。しかしただ一人、彼の「美德」を理解しない人間がいる。それはアフリカ娘のバルチェである。彼女は私的な感情、つまり恋愛のためにのみ生きており、ローマ人たちの「美德」への執着を、不思議そうに傍観している。

不自然なことに、バルチェは終幕まで、一度も主人公と対面することがない。彼らの出会いは巧妙に回避されている。主人公が登場する場面では、「美德」のために私的な価値を投げうつことの重要性が説かれ、バルチェが登場する場面では、個人的で優しい感情が何より大切だと主張される。この二つの価値観は、最後まで統合されることがない。バルチェは劇の途中で、突然姿を消してしまうのである。これはどういうことであろうか。

メタスタジオは、公に殉じることの栄光を讃えながら、一方で、その対立要素である、私的で繊細な感情を完全に切り捨てることはできなかったのだ。彼はそれを可憐なアフリカ娘の内に凝縮させ、主人公の栄光の陰に隠して、そっと残しておいたのである。

第五章 「美德」からの逃避——田園と感傷

「美德」は、国家の礎となる究極の価値として称揚される。しかしその一方で、「美德」を窮屈な拘束と感じ、そこから逃げ出したいという願望も存在した。メタスタジオの場合、それは牧歌的要素への愛着という形で現れる。国家の命運を担う主人公たちは、あらゆる政治的な力関係から逃れて、美しい自然の中で清純な恋愛を満喫したいと望む。君主たちが統治の重荷を放棄して、自由気ままな牧人となることを夢想したり、王位継承者が自分の身分を知らないまま牧人に育てられるというモチーフが好んで使われる。また、生粋の宮廷人である主人公が、まるで牧人のように素朴な感情表現をする場合も多々ある。「美德」に従って国家を支えてゆこうとする意志と、理想化された田園への逃避願望という、相反する二つの感情から生じる緊張関係は、メタスタジオの劇を支える核となっている。

ただしメタスタジオの場合、自由の桃源郷としての田園生活が、束縛と虚飾に満ちた宮廷の批判に直結することはない。彼はさまざまなやり方で、田園と宮廷の間を結ぶ回路を設定し、最終的に牧歌的要素が絶対主義国家の秩序に吸収される様子を描く。田園は、単なる息抜きの場や宮廷のアンチテーゼではなく、王の権威を高めるものとしても機能する。

当時の貴族たちは、宮廷の拘束から逃れたいと願う一方で、現実の田園では生きていけないことを承知している。だから彼らは、みずからの権威の拠り所である君主の偉大さを、心の底から信じたいと願った。メタスタジオは、自分を含めた宮廷人たちの願望を鋭い感性で感じ取り、それを洗練された形で舞台上に現した。その意味において、彼は真の宮廷詩人だったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、18世紀のオペラ台本（リブレット）の作者として、汎ヨーロッパ的な名声を博したイタリアの詩人、ピエトロ・メタスタジオ（1698-1782）の作品について、本格的に取り組んだ日本で初めての研究書である。

論者の研究態度はフィロロジの方法に忠実に従っている。つまり論者は、現代的な見方を無意識に持ち込むことを極力排して、18世紀の文学作品をその時代の人々のメンタリティーに基づいて分析し、その時代環境の中で理解するという素朴

で素直な方法を厳格に守っている。具体的には、先ずメタスタジオのすべてのリブレット作品や書簡集を精読し、その中に繰り返し現れる《美德》というキーワードに着目してその用法を詳細に分析し、それによって様々な階層の男女の登場人物の、心の奥に潜む倫理観や社会観を浮き上がらせるとともに、さらにその奥底にあってその心理や行動を下支えしながら影響力を及ぼしている、絶対王政のイデオロギー構造を明るみに出そうとしているのであるが、その論者の意図は、本論文においてほぼ見事に達成されている。

メタスタジオのリブレット分析から生まれた成果を、ほんの一部分ながら紹介したい。第一章では《美德》という抽象的な行動原理の、身分の違いに応じた具体的な表れ方が分析される。先ず《美德》とは、すべての人間がそれに則って行動すべき普遍的徳目ではあるが、実際には、個々人が身分に応じて自分の私的な欲望を抑制し、自分に与えられた社会的な義務と役割を果たして、共同体の秩序を維持させるのに必要な原理である。従って、王こそは、共同体の幸福を実現するために、率先して他の誰よりも多く個人的な欲望を断念する者でなければならない。王位に伴うのは超人的な義務と試練と完全な自己犠牲だけであり、その自己犠牲ゆえに王はこの世で最も尊い存在なのである。論者はこのような王のあり方を《玉座の上の殉教者》と定義している。他方、臣下に求められる《美德》は、このような王のために自ら進んで自分の命や私的な愛情を犠牲に供することである。しかし幸いなことに、臣下たちの自己犠牲は、その覚悟の程を見せるだけで、必ずや王の寛大な心によって救われ、報いられることになる。

王に求められるもう一つの《美德》は寛容である。王は外敵を撃破して征服し、陰謀を企む内敵を暴いて処罰するだけでは、まだ真の王ではない。彼は他人に打ち勝つよりも、自分自身に打ち勝ち、他人を許す寛容の《美德》を身に付けて初めて、真の栄光を得るのだ。つまり、寛容の《美德》の力で野蛮人や悪人を精神的に屈服させ、改悛させることが求められるのである。では、王は法や秩序を破った犯罪者を許してもよいのか？ 法を臣民に与えた王は、法を超えた存在であり、王と臣民とを明確に区別するものは、自分の命を狙う者さえ慈悲深く許すことのできる寛容の《美德》である。王とは《玉座の上の聖人》であるべきなのだ。（この見事な命名も論者独自のものである。）

第二章では、《美德》は普遍的な徳目のように見えるが、実は階級差、性差、民族差に応じてその保有の多寡が異なっていて、最終的には当時の位階秩序と他民族支配を正当化する根拠となっていることが明らかにされる。王は臣下よりも、男性は女性よりも、文明人は野蛮人よりも多くの《美德》を生まれつき持っている。それゆえ《美德》を多く持つ者が、より少なく持つ者を支配し、教化し、文明の恩恵に浴させるのは正当であり、また義務でさえある。そして、この《美德》の価値を認めず、その帝国の傘下に入ろうとしない野蛮人は、共同体から追放されて抹殺される。輝かしい《美德》は、その背後に差別と排除の暗闇を蔵しているのである。

第三章では、メタスタジオにおける王と父のイメージの相似性と互換性が分析される。王は慈父のように国民に接し、国民は子供のように王に慣れ親しんで従うことが、理想として繰り返し説かれるが、彼の劇中に現れる現実の父親像は、その正反対の伝統的な家父長である。父親たちは我が子に対して生殺与奪の権利を持つと公言し、専制君主のように振舞うのが当然で、それが自然の摂理だと考えている。しかも現実の家庭は、優しい愛情を育む私的な集団ではなく、専制君主である父への自己犠牲という《美德》を教え込む、国家の最小単位としての公的集団である。つまりメタスタジオは、王と臣下の関係を寛大で慈愛に満ちた父親と子供との関係として、意図的に美化して描く一方で、王に対する家臣の厳しい滅私奉公と自己犠牲の義務の方は、子が父親に果たすべき当然の自明の義務として、暗黙の内に了解させようとするのである。

このアンシャン・レジーム期の家父長体制にあって、その家庭＝国家秩序を内部から乱す可能性があるのは、母親の存在である。母親は自分の子供に対して無条件で無償の愛情を注ぎ、子供のためなら不条理で反社会的な行動に出ることも辞さない。それゆえ、メタスタジオは、たった一度だけ母子関係を舞台に登場させ、しかもこの母子を危険で呪うべきものとして破滅させ、幕引きをしている。

第四章では話し変わって、舞台を共和政ローマに取り、祖国のために命を捧げる英雄的な政治家の《美德》を厳粛に賛美するオペラ『アッティリオ・レーゴロ』を取り上げている。共和政体においても、公人の偉大な祖国愛や遵法精神と、私人の肉親愛や家庭の幸福が、同一人物の中で調和的に共存するのが難しくなる場合が生じる。もしこれが君主国ならば、法を超越した救済者である王が登場して、苦悩する臣下の義務と人間的な愛情を救い上げ、両者が矛盾なく共存できるように、再び社会秩序の内部に収めてくれるのだが、共和国には王ではなく法が君臨するので、心の分裂は避けられない。それゆえ

メタスタジオは、主人公のレーゴロには、肉親への愛を人間的な弱さに見なさせ、決然と死による栄光を求めさせるのだが、その代償行為として、荒筋とは無関係に、自分の小さな愛情のためだけに生きる可憐なアフリカ女、バルチェを登場させて、公に殉ずる《美德》の無意味さを密かに語らせるのである。しかもこの2人は同じ舞台上で相まみえることがない。以上のことは、メタスタジオが後者の私的で内面的な愛情世界を完全に切り捨てることができなかったことを示すものだ、と論者は断じているが、これは論者ならではの独創的な卓見である。

最後の第五章では、国家秩序の礎として称揚される《美德》が、一方では人間的感情を圧殺するものと感じられ、宫廷社会から逃れて、自然の中で自由で素朴で平和な牧人生活を味わいたいという強い願望があったことが述べられる。これは古代ギリシア以来、ヨーロッパ文学を貫流している、都市文明や宫廷へのアンチテーゼとしてのアルカディア願望である。だが、メタスタジオの場合は、この両者が対立でなく、密かに通底し合い、互いに補完し合う関係になっているのである。彼のオペラに登場する都会的な貴族は、羊飼いのような純粋さと素朴さを備え、羊飼いのように無垢な心情を吐露するのが常である。まるで宫廷の中に羊飼いが入り込んで来たかのような。実はこれこそ宫廷人の願望が生み出した理想的な貴族＝牧人像なのである。森の無欲は宫廷の《美德》に通じ、《牧人の王》(Il Re Pastore)こそは、抑圧的な《美德》と自由で素直な感情の間の亀裂を再び癒合させた理想の人間像、「宫廷が持つ威厳と優雅、森が持つ無垢と純粋の奇跡的な融合」なのである。ちなみに『牧人の王』というのは、ウィーン宫廷の貴族たち自身が演じるために、メタスタジオが制作したオペラの題名そのものでもあった。

以上のように論者は、緻密なリブレット分析から、極めて興味深い絶対王政のイデオロギーを浮かび上がらせるのに成功しており、これが論者の最大の功績である。だが本論文にも、なお望まれる点がないわけではない。このリブレット分析から再構成された《美德》の原理は、余りに抽象的過ぎる。実は彼のオペラがウィーン宫廷で初演される時、観客は当時話題になっていた政治社会情勢を念頭に置きながら、オペラを鑑賞したはずであり、詩人自身もその話題を踏まえ、その情勢に言及されるのを承知の上で創作したはずである。オペラは、たとえ現代と懸け離れた時代に舞台を移した抽象的な物語であっても、作者も観客も皆、そこに現代の情勢を投影しながら解釈したのである。それゆえ、当時のハプスブルク帝国を取巻く歴史的情勢や、初演時に招待された各国要人やその席次を仔細に調査した上で、個々のオペラを分析したならば、もっと具体的で豊かな成果を挙げられたのではないかと思う。だが、これは無いものねだりであり、その成果は論者の今後の研究に待つことにしたい。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2002年2月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。